

1976年5月30日

目次

米国で感じ考えたこと	小谷 英文	1
Enthusiasm	天野 實	3
流動への反抗	石井 直人	4
コンピューター人間	佐々木 紘	10
現代科学技術の方向	黒岩 祐治	10
総合科学部の若手研究者として	小南 思郎	13
詩		14
私の研究	三浦 省五	15
私の研究	小野 光代	16
原理運動を問う	野田泰三・石井直人	18
三つの書評		
高木市之助全集のこと	深萱 和男	22
中岡哲郎著「工場の哲学」	志村 賢男	23
講座「農に生きる3」"土"に生命を	鈴木 達彦	25
学部を考えるひとつのデータ 羊たちの午後	村田 格	26
51年度受験生に対するアンケート	村田	27
学部の記録		31
編集後記		34

米国で感じ考えたこと(1)

小 谷 英 文

'75年夏、着任して間も無い私だったが、諸先生方の御理解を得て、米国研修の機会を持つ事ができた。渡航の目的には大きくは2つあった。ひとつは米国のGroup Approachに多大な貢献をし、研究と実践活動のメッカと言われているEsalen Institute 招きのもとに、ここで約1ヶ月余りの夏季研修に参加する事であった。第2の目的は、私が研究を続けている理論の創始者であるCarl R. Rogersが主催する16日間のWorkshopに参加する事であった。このWorkshopは"Person-Centered Approach"と名づけられ、この年から始まった新しい形体を持った学会のようであり、相互の研究成果、問題点、新しい方向のコミュニケーションが行なわれた。そればかりでなく、それらの研究成果が経験的レベルで実践的に、あるいは実験的に吟味され、さらにそれぞれの実社会のコミュニティにそれらがいかにか実現され得るかという事までが問題にされる、極めて独創的な集会であった。第1回目の会であったにもかかわらず、10数ヶ国の参加者が200名近く参集し、寝食を共にして16日間を討論と実験的試みに費した。今後の楽しみな会であるように思う。このWorkshopに関しては、日本精神技術研究所を通じて報告を行なう事になっている。Esalenに関して何らかの形で報告の機会を持ちたいと考えている。

これら研究所や研究会の活動とは別に、私は同世代の人々の生活を覗いたり、学生と話をする機会にも種々恵まれた。その中で私が感じ考えた事をここでは、私の相談室活動との関連の上で書いてみたい。

あるきっかけで、私は私とちょうど同年齢のマイケルという男と交遊を持つ事になった。彼は他の友人3人と貸家のワンフロア(one floor)を借りて住んでいたが、私と妻にその合鍵を作ってくれて、その住居をいつでも自由に訪れ利用する事を許してくれたのである。私達はシスコ滞在中、情報が欲しい時、ひまな時にはよくそこを訪ねて、話をしたり、パーティに入れてもらったりしていた。アパートはワンフロアで5部屋とD. K.等々のつい

た広いものだったが、中流より低い程度のもので、彼ら住人は自分達をブルーワーカーだと称していた。

そこを気楽に訪ねるようになって、いつものようにそこにたむろしていると、住人の一人ジョーが、1年仕事に行っていたニューヨークから帰って来た。1週間もすれば今度はロスに行くという。型通りの会話が済むと彼は私に「お前はどんな仕事をしているのか」と聞いてきた。私が何の抵抗もなく「大学に勤めている」と言ったところ、彼はしばらく黙って何か不思議そうな顔をしながら、「お前は定職を持っているのか」と聞くのである。私には彼の感じている事がよく分らなかった。アメリカは不況で仕事がありません、私が定職を持っている事にうらやましさを感じているのかと、いささかうがった考えも湧いて来た。私は聞いてみた。「お前は定職を持っていないのか、これまで定職についていた事はあるのか、ないのか。」彼はあっさり、実にあっさりと応えるのである。「持っていない。仕事はいろいろするが、定職ではない。」あまりにあっさりと言いのけてくるので、今度は私の方が不思議な顔をする番になった。どうも不況で仕事がないと言う事ではないようだった。そればかりか、ジョーの話からすると、仕事は探せばあるし、1週間のうち2日か3日働けば食べて行けると言うのである。分らなくなって来たので、初めにもどって聞いてみた。

「おれが定職を持っている事が不思議なのか、なぜあんなに驚いた顔をしたのか。」彼は「いやー、何かお前がえらく早く自分の定職を決めたように思えたから……。」と言う。私は大学生活以上に大学院生活が長くあったし、その間いろいろの仕事はしていたものの、大学時代の同級生に較べると、定職につくのはずっと遅く、その年着任してやっと自分の定着した職場を持たたという感じを持っていたので、ジョーのこの言葉はまた分らなくなって来た。さらにジョーに耳を傾けてみると「おれは最近になってやっと自分の仕事をこれにしようという実感が湧いて来た。自分の生活、生きる方向のようなものがつかめて来たんだ。おれは作家になるんだ。ロスには

その仕事を探しに行く」と言うのだ。「ははー、これはお前が作家という特殊な仕事に興味を持っていたので、なかなか決心がつかなかったんじゃないのかー？」私は少し分った気がして来た。「そうかも知れない。だがそうでもないとも言える。友達多くはやっぱり定職につくまでいろんな事をやるよ。」彼によると、少くとも彼の周囲では大学を出てすぐに定職を持つという事はめずらしい事ようだった。2転、3転してようやく状況が分かり始めた。どうやら彼にしてみれば、定職を持つという事は、一種の人生を探しあてるといふか、生きる場を定めるといふような意味を持つらしい。心理学的に言い換えるなら、自己の発見に連なるものらしいのである。心理学者でもない彼が、まじめに言うのだ。それでも私は作家をめざしている彼にして考えられる事だと思っ、今度は同じ住人の植木屋ジムに聞いてみた。「おまえはどうなんだ。植木屋という定職を持っているんだろう。独立してやっているんだから、もう長いだろう。ジョーの言うような事を考えるのか。」自称ブルーワーカーの彼は応えた。「植木屋はつい1、2ヶ月前に始めたばかりだ。今植木屋が確かに気に入っている。だけどこれが自分の定職になるかどうかは分からない。」彼は大学を卒業して自分の気に入る仕事が見つかるまで、あるいは自分の気に入る生活が見つかるまで、仕事を変え、土地を変えて、自分の人生を探すとすうのだ。国内にとどまらず、多くの者が国外に出て行く。大学を卒業すると海外に出て自己を見つめるのが当然かのような感覚さえ持っている。自称ブルーワーカーの面々が実に心理学的なので驚いた。別の例でEsalenで下働きをしながら勉強していたロジャーという男がいる。彼は東部で高校の教師をしていたが、教育の現場で多くの教師が生徒の人間性の開発という事を忘れ、ただ管理的な目で生徒を見、成績でのみ評価をして行くという事実とうんざりして、彼はイージーライダーになった。貯金をはたいてオートバイを買い、気ままな旅を続けて、大陸を東から西へと渡って来てEsalenへたどりついたらしい。長い旅の末、彼はそれまでの教育に満足ができなかった部分をもう一度たたきなおし、自分の考える教育、思想、生活を実現できるめどがつきそうになったのだ。「自分の人生が見つかりそうだった。だからオートバイを捨てた。今自分の人生を持っている。」彼は誇らしく言った。

文字通り、人生を旅する彼ら、行動的なアメリカ人という事を考えれば、想像のつかない事でもないが、彼らの旅はそれだけではなかった。心理学でいう“自己の探求”自己への旅路にも非常に強い関心を持っているのに驚いた。自己探求を援助する精神的エクササイズや場を提供する組織や機関が実に多く種々様々にあった。ヨーガ、ズブドー、T. M., T. A., Radix, Gestalt Meditation, Bioenergetic Group, Basic Encounter Group等々、宗教に起源を發するものから、心理学、社会学によるものまで数々あり、それらが公的な機関、私的な機関、宗教的な機関それぞれによって、地域社会の住民の生活に極めて近い所にあり、溶けこんでいるのである。それらのグループはセミナーとかワークショップと呼ばれ、マイケルもその他の住人も、その恋人達も、それらの参加を極めて日常的なものとしていた。マイケルとジム、そしてその恋人達は、ESTAと称されるセミナーに毎週通っていたので、一度ついて行って見たが、実に盛況だった。フォード大統領が銃でねらわれたあのセント・フランシスホテルの大ホールに会員が参集してイメージを主体とした精神的エクササイズを行ない、その体験を相互にしかも自由に分ち合う。私には何かしら新興宗教の集会のようにも映ったが、彼らはきっぱりと言った。「これは宗教ではない。自己を磨く精神的エクササイズだ」と。マイケルはセミナーに出るようになって、他人に対してより自由になり、同居人との関係を始めとして、種々の人間関係がとてもスムーズになったと私に語ってくれた。彼は独立して映画を作る芸術家だが、それによって自分の仕事もより創造的になっているとも言った。

方法が何であれ、そしてそれらの方法を通じて、彼らがどこに到達して行くかは別にして、ジョーとの対話をきっかけにして、私はアメリカの私と同世代の人々が、外的にも内的にも行動的にも精神的にも、とにかく自己への探求に高い興味を示している事を目の前にした。

60年代は「激動の若者の時代であった」とよく言われる。主役はヒッピーと反体制の活動家であった。反体制の象徴としてひげをはやし、マリファナとロックに酔い、そして反戦を闘った。マイケルもその典型的なひとりだったようだ。かつてはあのウッドストックで彼もけたたましくドラムをたたいていたそう。愛を歌い、平和の闘いに直接的にも挑んで